



### 「これだから、研究はやめられない」

2022年12月2日、サッカーワールドカップ決勝トーナメント出場をかけたグループステージ最終戦、日本は大逆転で、スペインをくだし、決勝トーナメントの切符を手にした。ドイツに勝利したものの、コスタリカに負け、技量で勝るスペインには勝てるはずがない、と多くの国民は1次リーグ敗退を覚悟した。しかし、日本代表は勝利を信じて戦い、強豪国のスペインに勝った。今や、監督、選手への絶賛の嵐である。ネットもテレビも連日・連夜、各選手のインタビューやコメントを繰り返し、大いに盛りあがっている。ドイツ戦でもスペイン戦でもシュートを決めた堂安選手の「ドイツに勝ったことがまぐれでないことが証明できた」、前線で走り回り相手に余裕を与えなかった前田選手の「最高っす」など、にわかサッカーファンの筆者は、どのコメントにも激しくうなずき、感激で涙が止まらない。酷評されても、次の勝利を信じてチームを率いた吉田選手の「これだから、代表はやめられない」の言葉も筆者の頭に残った。

研究をやっている、でも、「これだから、研究はやめられない」と思うときが、1年に1回くらいある。「諦めかけていた化学合成が、ダメ元で試した試薬でうまくいったとき」「手こずっていたタンパク質が、ようやく精製できたとき」「苦労して開発した実験系で新規なデータが得られたとき」など、立ちほだかる研究の障壁に風穴を開けたと思えたときが、そんなときだ。それまでの苦労が一気に報われ、脳内の報酬ホルモンがうんと放出され、学生と共に喜びを分

かち合う。ランダムに訪れる報酬ホルモンによる快楽は脳に強く記憶されるという。報酬ホルモンを欲して研究を行うのは、ギャンブルにハマっているのと同じで、よろしくない、との批判はあるが、研究にギャンブル性がなければ、研究者は研究に飽きてしまうか、高い目標を設定しないだろう。報酬ホルモンの旨さは達成目標の高さに比例するだろうから。そもそも、報酬ホルモンの放出は自然の摂理で、理性で制御できるものではない。私の恩師も「これだから、研究はやめられないんだよねー」とつぶやかれたのを記憶している。

博士課程・博士後期課程への進学者が少なくなっている。教員が指導する学生を弟子としてアカデミアの道に誘えなくなっている、ということだ。筆者が博士後期課程への進学を決めた理由の一つは恩師の先生をみていて、「先生のように好きなことことをやって楽しく生きたい」と思ったからだ。研究には、先生をして「これだから、研究はやめられない」と言わせるものがあることを知り、報酬ホルモンの味を共有したからだ。

カタールでの日本代表の戦いぶりをみて、サッカー選手になりたいと思う子供は増えるだろう。若きJリーガーは日本代表になるために練習に励むだろう。日本サッカーは一段と向上するに違いない。挑む者の姿は人の心を打ち、人を動かすのである。予算が少ない、雑用が多すぎる、国は科学を理解していない等、不平不満を言えばきりがない。愚痴の多い先生に憧れ、先生のようにになりたいと思う学生はいない。博士課程への進学者を増やすには、先生が、「これだから、研究はやめられない」と、心からつぶやかなくてはならない。目標は困難であればあるほどよしだ。何回でもチャレンジし、苦しみを味わおう。諦めずに続け、達成したものだけが味わえる報酬ホルモンの甘美な味を堪能するために。

(にわかサッカーファン)